

## 指導教授推薦文

論文等テーマ アメリカ企業の女性雇用状況と課題

著者名 染谷真己子

第2次大戦後、アメリカでは労働力不足から女性雇用の問題がでてきていた。これに関する研究の第一人者はロザベス・モス・カンターであるが、彼女の研究以後、多くの研究が編まれて来た。この発端となったのは「グラス・シーリング」論であり、「ラビリンス」論である。グラス・シーリング論が最初に取り上げられたのはウォールストリート・ジャーナルである。女性のビジネス界での活躍に眼に見えない壁があり、それを打ち破るにはどうすればよいのかを社会に呼びかけたものであった。その後の代表的な研究はアリス＝リンダの研究である。染谷君は丹念に膨大な著作を読み、これまでのカンター理論から一歩進めた論文である。

今回はアメリカ政府関係の資料にあたり、女性の雇用状況、女性の高学歴化という問題にも立ち入り、また、アメリカの男女の賃金比較も理論的なアプローチと同時に行っている。このような政府の統計局の作成したデータがどれほど現実を表しているかわからないが、多くの分野で女性の目立った動きがあり、このような背景を基にして、将来、問題となっている高齢化社会では女性をどのように活用するかが企業の生死を決するものになることは間違いない。

以上のような背景に対して、漸く、日本でも本格的な女性活用論が問題になっており、その活用に対応するために、企業の将来にわたる方向を考えているのが本研究である。

以前のものから今回は新しい研究を取り入れ、あらたな方向を見つけ出すための研究になっている。論文として評価できるものであると考え、『大学院論文集』への掲載を推薦いたします。

2008年10月31日

推薦者（指導教授） 武内 成

論文等テーマ 「かもしれない」の諸相

著者名 蔣家義

論者・蔣家義君は修士課程で研究を始めて以来、一貫してモダリティの分析方法の開発に取り組んでいる。その成果は着実に結実しつつあり、本論文集 第4号(2007)において「言語行為論による語気助詞の分析方法—『吧 ba』を例として—」

を発表し、第5号(2008)において「認知的モダリティの再定義—『だろ』と『推量』から見る認知的モダリティ—」を発表した。このほか、本年は「ハズダと認知的モダリティのための認知心理的な分析モデル」(『言語と交流 11』言語と交流研究会 凡人社 2008)を発表し、また、中国語での論文も発表している。

本論文は認知的モダリティの一つである「かもしれない」について、先行研究を綿密に調査し、その恩恵に浴しつつ、論者自身で開発しつつある認知心理的な分析モデルを適用して分析を試みている。その結果として、その分析モデル自体を拡充するに至ったが、これも成果の一つである。また「にちがいない」との異同についても考察している。

本論文は一連の研究の中に位置付けられる性質のものであり、この論文を単独で見るとき、特に分析モデルを本論文内のみで単独に見るときには難解さを伴うことは否定できない。これは研究途上にあるものの宿命といわざるを得ない。

論者は博士論文の完成を目指して、真剣に、また手堅く研究を進めているので、この論文を本論文集に掲載することにより、識者のご指導を仰ぐことができるようになれば幸いである。読者のご高配をお願いする次第である。

本人の今後のさらなる精進を見守っていきたいと思う。

2008年10月31日

推薦者(指導教授) 今 泉 喜 一

論文等テーマ 中国におけるブランド消費動向

著 者 名 李 潔

今回の李さんの論文は「中国におけるブランド消費動向」と出し、最近の中国における所得と消費行動の変遷を中国語の文献から考えたものである。

まず、問題提起において中国人の消費動向の変化とともにどのような購買行動がとられているかについて述べ、中国政府の出しているデータを使いながら分析していく。第1章では中国全土の地理的な経済的背景について概観する。そして、これに関連して地域格差の問題と高額所得者層の実態について述べる。さらに、所得の格差は都市間も大きく異なるが、世界からのブランド品を取り扱う店舗の進出もこれを表している。

そして、このような高額所得者とはどのような職業であるかを取り上げ、いわゆる富裕層がどのように伸びて来ているかを述べ、そのライフスタイルについても触れている。この社会層はマイホーム、自動車、別荘の取得にまで目標とする層であり、この社会層に限って言えば、他の先進諸国とあまり変わらなくなっている。

高級品志向は所得が上がるにつれて増える傾向にあり、経済がこのまま発展してゆ

くとすれば、消費ブームがより一層、高度化していくであろう。そして、中国人独特の消費性向である他人との差別化という意識がこのような状況に拍車をかけていると言うことである。

このような李君の分析は大学院の前期課程から追究して来たものであり、分析方法を見ても今後の研究発展に期待を持たせるものであり、論文として『大学院論文集』に載せられる論文である。

平成20年10月31日

推薦者（指導教授） 武 内 成

論文等テーマ 日本語教師養成プログラムの研究  
—マイクロティーチングを使った実践的教育法の研究—

著 者 名 関 かおる

論者・関かおる氏は10年以上にわたり日本語教師の海外赴任前研修に携わってきたが、その経験の中から、研修の実施方法に改善の余地があるのではないかとの思いを強く抱くようになった。また、近年、研修実施を取り巻く人的・時間的制約が大きくなり、研修の工夫と効率が求められるようになった。論者はこの2点から、本大学院において、より効率的な研修実施方法の模索を始めることとなった。

その結果、スタンフォード大学で開発されたMT（マイクロティーチング）方式が研修方式として最適であるとの結論に達し、これに関する調査・研究を進めた。その一方、MT方式による研修の有効性について4回にわたる調査を行い、その有効性を確認することができた。修士論文では調査データに基づいて考察を行いつつ、研修プログラムへのMT方式導入の利点について論じたが、本論文では紙幅の関係から、その概要を示すことになった。

本研究は、日本語教師研修の改善のあり方について成果を収めており、この点が高く評価できるが、同時に、やはり制約の大きくなってきている学部の日本語教師養成課程での実習のあり方にも大きな示唆を与えており、この点からも高く評価できる。

論者は業務上の必要からこの研究を始めたのであるが、今後もさらに研究・調査を進め、考察を深め、日本語教師養成のためのより効率的な実践プログラムの開発に取り組みたいと決意を新たにしている。ぜひそのように進めていって成果を挙げていただきたい。期待するところ大である。

2008年10月30日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一